

黒旗は破れた！

真 木 泉

1

一九三三年十一月の中頃、当時まだ東京市杉並区馬橋一丁目の植村諦のところへ、めずらしく二見敏雄が訪ねてきた。

二見はその頃戦闘的なアナキストの団体といわれていた黒色青年連盟の中でも、もっとも行動的だと見られる者の一人であった。彼の父は陸軍大佐であったが、その父の厳格すぎる家庭教育が、少年時代の彼の反抗心を呼びさまし、いわゆる不良少年の仲間に入って彼は早くから家を出ていた。彼のそのころの仲のよい相棒は、後の詩人菊岡久利であった。二人はふとして次第に社

会問題に興味をもつようになり、菊岡はやがて世田ヶ谷船橋の石川三四郎の許で農耕生活を手伝いながら無政府主義を勉強して、黒色青年連盟に加わったりしていたが、その後横光利一の文学の弟子になったり、思想も右傾していった。ところが二見は関東一般労働組合、挑戦社、小作人社、黒色青年連盟（黒連）と、もともと尖鋭で行動的なアナキストの道を歩いていた。彼の特色は思想を思想として語っていることができないことであった。ほんとうの思想は行為の中からのみ生まれて発展するという考え方に立っていた。

植村は僧侶、そして代用教員をしていたが、職業と社会の矛盾にくるしんで、郷里の寺の住職をやめ、学校の教員もやめて、流行してきたマルキシズムを勉強したが、その権力的な思想の性格にあきたらず、やがて無政府主義の傾きがはげしくなった。つてを求めて彼が朝鮮に渡ったのは一九二八年であった。京城にいて新聞や雑誌の記者をしながら、ふと当時の朝鮮の独立運動の人々と連絡をもったことが知られて逮捕されようとした。それを免れたのは、その時の総督府警務局長森岡二郎が彼の亡父の知人であったためで、朝鮮退去ということで見逃され、上京した。一九三〇年の秋であった。

そして植村はかねて文通していたアナキスト詩人岡本潤や郷里の奈良県時代からの友人野長瀬正夫らと交遊しつつ、杉並馬橋の松ノ木に住んで、アナキストの会合にも出てその団体に所属することとなった。また郷里にいた時から詩を書くことの好きだった植村は、岡本潤の他小野十三

郎や秋山清その他のアナキスト詩人たちと知り、やがてプロレタリア詩に戦闘的な詩人の名を知られた。最初の詩集『異邦人』も一九三二年に出て意想外の好評だった。しかし植村はそのような詩人の名に満足せず、まずアナキズムの立場からする文化運動に没頭していった。

その頃アナキストの間には統一的な文化運動の団体がなかった。植村は岡本や秋山とともに、その全国的組織を目的とする活動をはじめ、やがてその解放文化連盟は新聞型の機関紙「文学通信」を持ち、分立と対抗は急速に改められつつあった。その事務担当者として植村の責任は大きかった。

そのときは満州事変（昭和六年）五・一五事件（昭和七年）の後を受けて大陸進攻を目ざす日本軍部の計画は着々とすすみ、その圧力の下に政府の思想弾圧は激烈いよいよますます、猖獗をきわめて見えた共産党も大方壊滅というべき状態に追い込まれつつあった。

昭和初頭から共産主義運動に席を譲っていたような沈滞に追い込まれたアナキズムは、無産政党の活動を機に、反政治反政党の旗じるしで全国的統一的な横の連絡に成功したのが大正末期の黒色青年連盟の結成であった。しかしさきに述べた、サンジカリズム派との対立から、暴力的主張に大衆の離反するものが目立ちはじめた。それは一九二八年（昭和三年）の自連（全国労組自由連合会）から自協（日本労組自由連合協議会）の分立を見るまでに至った。純正無政府主義とサンジカリストの対立として捉えられているこの成行は、背後にもう少し複雑な内容もあり、他

方共産主義の拡大強化される時期に当たって、アナキズム運動そのものの衰弱をはやめる結果となった。

前記解放文化連盟の全国的統一の動きなどは、この情勢にたいする反省として現われたものであり、ようやく農民組合、労働組合その他の大衆的団体は、思想行動の団体との混同を避けることによって分立を改めようとする機運に向かいつつあった。各分野の独自の活動を尊重しながら、その上での統一と協力が行動化されようとはじめていた。

二見敏雄が植村諱を久しぶりに訪問したのは、こうした動向の中に植村が自分の道を苦慮しつつある時であった。そのころ盛んに書きまくっていた植村の論旨は、純正無政府主義を主張してきた者たちの、運動上の行きづまりとその消極化に向けられ、同時にようやく統一化の機運に向かいつつ、なお組織的大衆団体の安定的な気風の中の反革命的現状維持派への批判であった。どこを向いても、国家権力と激突する気力が薄弱であることへの、じりじりした焦燥が彼にラディカルな発言をさせていたのである。

二人は近所の喫茶店にはいった。植村が住んでいたのは高円寺駅に程近い、溝川を前にした家で、すぐ賑やかな表通りに出て、やや広くて明るい一隅に腰を下ろすと、話は二見から切り出された。

「近ごろ大分厳しいことを書いているね」

そういつて彼はタバコに丁寧に火をつけて、口もとに柔らかな笑みを浮べて目を向けた。そのころ植村は仲間の雑誌や新聞に、にじりよるような思いで怒りをぶちまけていたが、とりわけ当時のインテリどもが、何だかんだと理屈をつけて傾いてゆく時の情勢に順応してゆくことが卑怯な生き方に見えて攻撃せずにはすまなかった、その思いをぶちまけていたのであった。

中でもアナキズムとアナキストを、観念論、プチ・ブルと軽々しげに評価しつつってきた、共産主義系の学者や文士たちの、巧妙によそおった理論のかげで次第にたたかいを放棄してゆく姿が彼を怒らせさせた。

「今こそわれわれは立たねばならぬ時ではないか。だのに諸君は、勝手に理論を組み立てて退却を合理化しようとしている。かつて諸君が語りかけ、語りつづけた勇ましいことばはどこへ行った。言ったことは必ず行なえ。行なえないことは言うな」

とまで書いたものである。今向き合って坐った二見に、いくらか皮肉めいた笑顔で、そう聞かれると植村は、改めて自分の心中をふりかえらないわけにはゆかなかった。

「おれ自身にもはたしてその勇気があるのか」

ひそかにそう自問自答している植村を、追っかけるように、

「君は自分の書いたこと、言ったことに責任を持つだろうな」

と二見は、急所にふれてきた。勢い植村とて逃げる気はない。

「勿論さ」

と当然のように答えた。いくらかの逡巡と不安を感じながら自分に鞭うつ思いであった。

「それをきいて安心だ。間違いはないと思っただけだね」

そういつて二見は、乗り出すようにして雄弁になった。

「そうきけば安心だ。君が近ごろ方々で主張している通り、今こそ立ち上がらねばならぬときだよ。このままゆけば、イヤもオオもない、軍部の独裁政府だからな。そうなたらわれわれは根こそぎだよ。やられてしまうんだ。監獄か、コロされるか、どっちにしてもだ。議会なんか阻止する力は何もありはしないよ、社民党がまっ先に軍部の提灯持ちをするみたいなこといい出したんじゃ、もうおしまいだ。こうしちゃおれんじやないか。ね、一度、こんな話で集まって見ようじゃないか。君とおれとが発起でね、おれの方にも仲間はあるよ。有志の会合ってやつをやってみようと思うんだ」

「それには賛成だ。だが集めるのはどんな——」

「始めはほんの三、四人、そこで検討してみて、集めるメンバーを決めようじゃないか」

不安と、それから期待が、植村の心の底に湧きおこった。はじめの三、四人、まず彼と彼、それから、植村は自分を納得させるようにうなずいた。

外に出ると晩秋のそらがしずかに晴れていた。屋根に区切られた街の上の青いそらが帯のよう

に長い姿で二人の頭上にあつた。植村はこの日見たそのことを、その後幾年もたってからよく思い出した。もちろん後悔などではなく、なつかしい過去のひと時として。彼らは喫茶店の表で、何でもないうように握手したが、これはたしかに、そのとき二人が気づいたこと以上の出発点だったのである。

相沢尚夫と入江汎を伴って二見がその次にやってきたのは四、五日後だった。ことによると二見は相沢らとの話しあいをした後に植村に打診に来たのであつたかもしれない。植村は、だがそんな風に考えたことはない。またそんなことはどっちだっていいことだ。ともかく四人で集まつた。話題は情勢にたいするそれぞれの判断と見通しについてだった。七、八時間も熱心に語り合つて、再会を約して別れた。別れるとき、次回もまた四人で、そのときは情勢にたいして、何をなすべきか、何をなし得るか、如何になすべきか、の具体論にはいろいろと約束しあつて解散した。

その次の会合はまた四、五日後になされたが、次のことにおいて意見が一致した。具体的に最初の一步をもう踏み出したという思いで次のことをきめた。

(1) 情勢は切迫している。ぐずぐずしていると手も足も出なくなる。民衆を啓蒙したり組織したりしている余裕はない。敵権力は強制と圧迫によって一挙に押し流そうとしている。しかも、全民衆は生活の窮迫と圧迫によって、不満を急増大している。われわれが身を挺して行動をもつ

て権力の根幹をゆさぶれば、彼らの不満を爆発させることはできるだろう。

(2) そのために、われわれは今すぐ、行動を目的とする秘密結社をつくらねばならない。

(3) 秘密結社となれば、アナキストの原則たる個人の自由とか、自由連合とか、にこだわる必要はない。自己の防衛と、敵攻撃のためには、結社の定めた規約は結社の強制をもって守られねばならない。

省みれば、如何にもここまでの到達は坂を下るような速さであっていささか矯激の思いがなくなかったが、少しもそれが不自然でないほど、われわれは切迫した思いを自己の内と外に痛感していた。

そのころ相沢尚夫は、月刊紙「自由連合新聞」の編集に当たっていた。「自由連合新聞」はアナキズム陣営の代表的な機関紙であり、もと自由連合系の労働組合全体のための新聞であったが、昭和はじめからアナキストとサンジカリストの分離対立がひどくなった後は、もっぱら前者の側の立場から編集されていた。相沢は早稲田大学の哲学科に学び、在学中クロボトキンの研究からアナキズムに共鳴し「黒色戦線」(文芸誌)、「黒旗」(思想誌)の同人として活躍、また昭和七年入江汎、入江一郎と東京地方使用人組合を組織して全国労働組合自由連合会に加わっていた。

入江汎は沼津商業を中退して上京し、一時内務省社会局に働いたことがあり、その後沼津日日

新聞の記者や雑誌編集者を遍歴したが、古田大次郎の『死の懺悔』に感動してアナキズムに近づき、以後黒色青年連盟に加わって行動的なアナキストとして無軌道社、自覚と建設社、機械技工組合、東京一般労働組合などに関係し、相沢らと東京地方使用人組合を結成したことは前記のとおり。また演劇に興味をもって築地小劇場の研究生だったことがあり、飯田豊二、局清らが主宰した解放劇場(アナ系唯一の劇団)の同人となり、その第一回公演「ボストン」(サッコ・バンゼツチ事件)に出演したこともあった。

これらの四人(植村、入江、相沢、二見)はこのとき、次回の会合のためのメンバーを定め、それぞれ分担して連絡を受けもった。

そして昭和八年九月末のある日に、前記四人の他に寺尾実、田中喜一郎、三井利員、岡本潤の八人が高円寺二丁目の植村諦の家に、研究会の名目で集まった。その日は植村、二見、入江らは期して発言をひかえ、現状における人々の意見をきくことに重点をおいた。すでに四人はほぼ統一的な意見と決意とにおいて一致していたのでむしろ新しく迎え入れるための人々の時局にたいする決意の程を知ろうとしたのであった。

さらに数日後四人は会合した。さきの会合を検討し大体次のような意見におちついた。すでに植村ら四人は、単なる啓蒙や思想宣伝や現状分析を目的とするものではなくアナキズムの立場からの実践の段階において同志を募り、活動を拡充せんとするものである、という立場に彼ら自身

を位置せしめていた。だから、現状にたいする憤怒や反抗は同質であるとしても、革命の実践団体を組織するためには大義親を減するものがなければならぬ。すなわち当時（昭和八年）の日本の情勢の中では、活動は一身の犠牲を要求するところが大きい。その本人以外に活動のための犠牲を出さぬためには、家族扶養の義務者、妻帯者は除外しなければならないというところから、第一次決定メンバーを二見、相沢、入江、植村、寺尾として、昭和八年十一月三十日、相沢の住居だった東中野駅近くのアパートの一室に五人が集会した。そして秘密結社「無政府共産党」の発達の具体的準備がなされたのであった。そのとき夜を徹した討議の末、次のことがきめられた。

(1) この団体は直接行動によって一路戦争に突入しようとする情勢を阻止するためにあらゆる手段をとる秘密結社であること。

(2) そのためには無政府主義の原則にとらわれることなく、団体綱領、規約は鉄の規律をもって守られねばならぬこと。

(3) これは行動体としてのこの団体の自律の法則であって、これを大衆的団体に適用するものではないこと。

これらのことを基本的に確認した後、結社の名を日本無政府共産主義者連盟とすることを決定し、この五人をもって中央委員会を構成するとともに、それぞれの分担を定めた。

政治部	植村 諦
教育部	〃
労農部	相沢 尚夫
国際部	〃
組織部	入江 汎
財政部	二見 敏雄
書記局	寺尾 実

そして早速の活動目標として労働組合、文化団体のなかに、さきに定めた規程によって加盟者を求めること、およびそれらの団体をわが連盟の影響下に置くべく努力すること、の二つが定められた。そしてこの狙いは着々すすんだ。加盟の同志は穩密にえらばれ、いくつかの組織の中にその加盟者は活動を開始していった。

われわれと同じく日本の現状に憂慮しファシズムの台頭と戦争への突入を防ぎたいと思う人々は不活発を極めつつあったアナキズム陣営の中にも意外に多く潜在していることがわかった。われわれは、しかし単なる同志とか、アナキストとかいうだけで組織に加えようとはしなかった。人をえらび、その境遇をえらんだ。だから同志として組織の中に組み入れることの出来た人は必ずしも多くなかったし、また多数をまだ必要とするまでに至っていなかった。

日本無政府共產主義者連盟から日本無政府共産党と改称したのは、翌昭和九年一月三十日の中央委員会においてであった。連盟から党への改称ということには、まずわれわれの内部にあっての大きな飛躍がなければならなかった。とかくアナキストは「党」という言葉を歴史的に好まなかった。もちろんそこには、反権力主義に由来するふかい経験に基づく主張がある。それはこの上なく貴いものである。だが、個人の自由を尊んで、規約にしばられぬままに運動を展開することには、資本主義的現状の社会生活において巨大なマイナスを伴っている。あえてわれわれが「党」を称したのは、従来のごとく運動の中に個人の一〇〇パーセント自由を生かさんとするよりも、己を死なせてなお革命運動に自己を生かし理想を貫き、現実を変革せんためという思いであった。

「党」としての組織をわれわれは現実的な必要手段と見たのである。

2

われわれは「無政府共産党」と改称した意味と目的を、すなわちこの集団が従来のアナキズムあるいはアナキトスの集団とちがうものであることを明瞭にするために、まず綱領を定めることとした。昭和九年九月八日のことであった。それは次のようなものであった。

一 権力政治及び資本制の廃止

二 完全なる地方自治制の確立

三 私所有制の廃止

四 生産手段及び土地の共有

五 賃金制度の撤廃

六 労働者農民による生産管理

七 教育、文化の享有

八 人為的国境の撤廃

この他に行動綱領もきめられたが、それはわれわれのこの団体の成立過程からいって、きわめて性急といえるものであった。

○中央及び地方の組織の拡大強化

○全国労働組合自由連合会（自連）全国労働組合自由連合協議会（自協）等のアナ系労働組合に対する対策

○一般労働組合に対する対策

○解放文化連盟等の文化団体に対する対策

○農民組合に対する対策

等がかぞえられたが、その対策の真の眼目は、これらの団体のなかから、われわれと共に秘密

活動に入るべき行動分子をいかに獲得するかということのみにあった。これは労組や文化団体にたいするものとしては危険な性質のもので、これらの団体活動を協力して進めるものとはならないが、党育成の立場からは止むを得ざるものであった。十分そのプラス、マイナスを考慮の上のことではあった。

だから表面は、これら大衆団体にたいして、「反戦」「反資本主義」「反ファッショ」などをおかかげることをすすめながら、内容にはその中から獲得した分子に何をなさしめるかという計画が進められていたのであった。すなわちこれが党の活動の計画というべきものであった。次のようなものが考えられていた。

- 1、まず経済界を混乱させて社会不安を増大させるために大量の偽造紙幣を発行すること。
- 2、千葉県鵜原海岸付近の山中に埋蔵してあったダイナマイトを補充蓄積し、ある時期において東京の暗黒化をはかり、対外戦争を起こさせて敗戦に導き、民衆を蜂起させること。^(注1)
- 3、この目的のために軍事局、財務局、特務機関を設けること。^(注2)

無政府共産党は、わが国の無政府主義運動を盛り上げようとするところから発足されたが、昭和に入って反サンジカリズムの勢いが強くなり反組織的な風潮が風靡した後には、運動そのものの沈滞が目立った。その間隙を埋めるために、従来になかった集中的な組織が求められ、やや具体化したような姿がここに現出しようとしていた。そして組織を表面に立ててその内部に純正無政

府主義的な運動方法がとられようとしたことに新しく、注目すべき特徴があった。

無政府共産主義者連盟ができた昭和八年十一月から一カ年後には次の人々がこの秘密集団に入っていた。

労働組合からは全国自連の梅本英三、伊藤悦太郎、自協側からは田所茂雄、解放文化連盟から尾村幸三郎、木原実など。また二見敏雄の軍事局関係には浅倉トクノ(寺尾実妻)、坪田吟一郎、井上信一、三井剛等がいた。

右のうち梅本と伊藤はこの時期の全国自連の事実上のリーダーかつ運営者であり、田所は自協の書記局の実力者であり、また相沢尚夫は伊藤悦太郎とともに自由連合新聞(アナキズム系運動の総機関紙的役割にあった)の編集当事者であった。そしてまたようやく全国的組織体の文化団体として活動的となった解放文化連盟は植村が書記局にあり、編集にも携わっていたから、そのころのアナキズム系陣営の要所は、事実上われわれすなわち無政府共産党のひそかに把握するところとなっていた。

(当時私自身、以上のごとき認識に立っていたが、ここにはわれわれが党の存在の必要を痛感してそれを組織した、と同時に踏みこんだ一つの迷妄があったと現在に至って考えられる。党組織はもちろん革命運動の前衛的または指導推進のためには必要である。しかしわれわれが、あるいは私自身が自連、自協、解放文化連盟等の要所に党員が在ったということによって、それらを党

活動にそのまま動員できるかのように過信したところからの誤算を犯したということを痛感するものである。秘密集団が合法団体を指導できるということは反アナキズム的過誤を含む。秘密指導によって非合法活動に組み込まれたとき、その合法的存在は終結となるものである。労働運動や文化団体の活動は、それ自体の自主性によって運営されて生きるものであり、その尖鋭化も自主的にこそ進むべきものであることは、いうまでもない。われわれの無政府共産党がこれらアナ系の合法面の運動を指導し得ると考えたのは錯覚にしか過ぎなかった。党にその力はなかったし、これら団体を指導することは目的外のことではなければならなかった。当時の党の一人として、この回想的自己批判を私は一アナキストとして戦後に自戒するものである。

さて、ともかくわれわれの党の存在は所期の方向に進みはじめたが、わが国内情勢もまた急々に逼迫し、官制国家意識の高揚は激しくなっていた。